

二〇二四年四月二三日

句談義の四阿にいま若葉風	あひる
瞬かず鹿は遠目や花吹雪	よう子
生垣をクッションにして椿落つ	康子
春ともし阿修羅の影す後ろ壁	うつぎ
初音いま目つむりて聞く深山道	せいじ
円陣を組みたるごとく落椿	澄子
銀輪を降りて歩きぬ花の道	かえる
隣り合ひお国はどちら花の下	よう子
広庭は落花畳や療養所	むべ
照れば濃く翳れば淡き桜かな	澄子
水揚げのめかぶ切り分く朝市女	なつき
眉根寄す阿修羅に春の愁ひあり	たか子
春陰の菩薩足指反らしたる	もとこ
身をよじり十二神将春の塵	もとこ
分け入りし小暗き森の著莪真白	かえる
苔庭の花かと思れば紋黄蝶	うつぎ
射す日矢にきらめく桜吹雪かな	あひる
花添はせ見栄切る松の男ぶり	うつぎ

阿修羅像憤怒に春の愁ひ見ゆ	こすもす
草臥れた脚をさすれば山笑ふ	ぼんこ
広芝に刺繍のごとく花すみれ	かえる
花陰に生ふは地獄の釜の蓋	せいじ
天蓋の花を潜りてバス徐行	かえる
花吹雪古色の塔へ高舞ひて	はく子

定例WEB句会みの選

二〇二四年四月二三日